

ようこそ 盈進の読書科へ

VOL.7



読むことは「知る」こと 書くことは「考える」こと

盈進は「平和、ひと、環境」を大切にする中高一貫の学び舎です。豊かな言語を身につけ、確かな倫理観を養い、きらりと光る独創性に磨きをかけることを目指す「ひとづくり3教科」を学校共育の柱に据えることでたくましく生きる力を育む教育を展開しています。中でも「読書科」は、すべての学力の基盤となる「ことばの力」を培うオリジナル教科として特に中心的な役割を担います。34年間続く盈進自慢の教科です。

✧ EISHIN GAKUEN



「伝説の書店主」来校！

「本」がわたしに教えてくれたこと



小林由美子さん

1949年兵庫県生まれ。3歳の時に両親が尼崎市に本屋「小林書店」を開業。22歳で結婚し、1979年(30歳)の年に小林書店を引き継ぐ。彼女の仕事ぶりや生き方が知られるようになると同店をモデルにした小説や、奮闘ぶりを追ったドキュメンタリー映画が制作されるなど、10坪ほどの小さな書店にも関わらず「書店員なら知らない人のいない」名物書店主として全国に名を馳せる。2024年5月末、72年の歴史を持つ同書店は惜しまれつつ閉店。現在は月数回のイベントを継続するほか、関西を中心に講演も行う。

2025年7月9日 ホンモノ講座

2025年度第1回ホンモノ講座は、本にまつわる素敵なゲストをお迎えしました。兵庫県尼崎市の小さなまちの本屋さん「小林書店」の元書店主、小林由美子さんです。

小林さんを語る上で欠かせない1冊の本。それが『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』（川上徹也著 ポプラ社）。本校読書部が読書会でこの本を読んだことがきっかけとなり、小林さんとのご縁が生まれました。長い人生を本と共に歩み続け、そのバイタリティで全国にファンを持つ小林さんの言葉を届けたい、そんな思いで実現した今回の講座をレポートします。



『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』 (川上徹也著 ポプラ社 2020年)

小林書店とその店主、小林由美子さんをモデルにしたノンフィクション小説。なんとなく社会人になった出版取次の新入社員の大森理香は、上司の紹介で尼崎市にある小さな書店の店主と出会う。そこから彼女は仕事と人生への考え方が少しずつ変わっていく感動の物語。



(毎日新聞朝刊 2021年3月2日)

盛大な拍手に包まれて登場した小林さんは、車椅子に乗っておられます。長年書店で重い本を運ぶ作業を続けたことで腰に負担がかかったこと、そして近年はパーキンソン病の症状が見られ、リハビリを続けておられるのです。新大阪から新幹線で福山に来られるため、お身体の負担も懸念していましたが、小林さんは盈進生に「話したいことがいっぱいあるよ!」と意欲的です。



(朝日新聞夕刊神戸版 2024年5月29日)

いざ登壇されると、400名を越す生徒の前で、溢れんばかりの熱量でエピソードを披露してくださる小林さん。自分の幼い頃のエピソード、恩師との出会い、本への思い…お得意の関西弁マシンガントークは健在です。「未来は今日の掌の中にある。だから今日やるべきこと、考えるべきことをやる」、「人より上を目指そうなんて思わなくていい、昨日の自分をこえたかどうか」、「本を読む意味はね…愛する人を幸せにするためなんよ」小林さんの口から繰り広げられるたくさんの名言を聞くたびに、真剣にメモをとる生徒の姿が見られました。



《生徒の感想から》

私は本を読むことがあまり得意ではありません。自分から本を手取ることもあまりしません。ですが、小林由美子さんが盈進に来てくださり、本について語ってくださったおかげで、本に対する思考が変わりました。小林さんが「本は愛する人を幸せにするために読む」とおっしゃった瞬間に、今まで感じたことがないくらい本が読みたくなったのです。私も本に出てきた言葉で、自分の愛する人に感謝を伝えてみたいです。これからは、誰かを幸せにするために本を読もうと思います。

(1年生)

お話が一段落ついて、休憩時間に入ると小林さんの周りに人だかりが！なんと、小林さんにサインをしてもらおうとする生徒たちが行列をなしていました。小林さんは1人ひとりに笑顔で対応されていました。なお、今回の講演に合わせて小林さんは、「盈進生におすすめする本」として、14冊の本をリストアップしてくださいました。



さて、終盤は毎回恒例の質問コーナー。今回も多くの手が上がりました。小林さんは質問に丁寧に答えてくださいます。その1つ1つの言葉が、盈進生へのエールになって胸に響きます。

今日は「読書っていいな」と改めて感じる事ができました。読書をする事で人生が豊かになります。「出会うタイミングは遅くもなく早くもない」という言葉の通り、今日小林さんと出会ったのもちょうど良いタイミングだったのだと思います。盈進に来たから小林さんと出会うタイミングに恵まれたのだと思います。

(1年生)

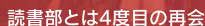


今日のホンモノ講座は今までの中で1番いい講座でした。私は盈進に来てからもっと本が好きになり、そして今日、小林さんのお話を聞いて、さらに本が好きになったような感じがしました。本を読むことで、たくさんの知識が身につく、誰かに元気を与えることができるんだな、という自信も湧きました。今日の講演メモは宝物のような言葉で埋め尽くされました。これからも本と人と共に生きていきたいです。

(2年生)

私はホンモノ講座で小林さんが来られると知ったその日に図書館に行き、『あの日、小林書店で。』を借りました。帰りの電車の中で読んでみたところ、ページをめくる手が止まらなくなり、危うく乗り過ごすところでした。小林さんの温かさや優しさが文章につまみついて、とても心に沁みました。それは実際小林さんにお会いしてお話を聞いたその言葉とも重なるものでした。次の週末に、私が小さい頃通っていた小さな本屋さんに久しぶりに足を運ぼうと思います。そして小林さんがおっしゃっていた「まちの本屋を育てる」1人になりたいと思います。これこそ「未来は今日の掌の中に」だと思います。

(3年生)



あの日、
小林書店で、
用土敬也

小林書店

目録/年表

『仕事で大切なことはすべて
尼崎の小さな本屋で学んだ』
を改題&再編集し、
ついに文庫化!

他にも話したいエピソードはいっぱいあるんやけど、一番印象に残ってるのは、広島県福山市にある盈進学園という私立で中高一貫の学校に行った時のことかな。そこは全国唯一の読書科がある学校で課外活動の読書部もある。

ある日、うちに荷物が届いた。

開けてみると盈進学園読書部の生徒からの手紙が、いっぱい入ってた。読書部顧問の先生が「尼崎本を課題図書に選んでくれて、部員のみんなが熱い感想文を書いてくれたんや。どれもすごい嬉しい感想ばかりで何回も泣いた。これは絶対学校に行ってお礼が言いたいと思った。

著者の川上さんに話したら「僕も行きたい」と言う。学校に電話したら「ぜひいらつしやってください」とのこと。それで川上さんと盈進学園に行くことにしてん。

ほんまに大歓迎を受けて、校長先生と読書部顧問の先生が学校を案内してくれはった。校舎の中の内たるるところに本が置いてあつて図書館も立派で陳列方法もとても工夫してある。書店も参考にとどるところが、いっぱいあると思った。読書部の生徒さんともいろいろ喋れて本当に楽しい時間やつた。

（『あの日、小林書店で。』より）



2022年、著者の川上徹也さんと初来校の様子

A cartoon illustration of a blue bird with a yellow beak and feet, holding a brown envelope in its beak. The envelope has the word "message" written on it. The bird is standing on a light orange ground, and a large orange circle is in the background.

[illegible]

ホンモノ講座後に頂いたお手紙(一部抜粋)



「読書の日」はじまる！



2024年度、盈進に新しい行事が誕生しました。その名も「読書の日」。自分の好きな本を自由に読むという、なんとも素敵な時間です。思い思いの本を手し、図書館、多目的ホールで思う存分読書を楽しむ生徒たち。2年目の2025年度、図書館のオリエンテーションや「芸術の日」に訪れる「銭天堂へようこそ」展に向けた準備などを盛り込んだ、ぜいたくなプログラムに取り組む元気いっぱいの1年生を取材しました。

今年の目玉は何と言っても、担任の先生による屋外での「読み聞かせ」企画！まさか中学生になっても絵本を読んでもらえるなんて…嬉しすぎますね。さあこれから始まる盈進での6年間、先生たちから愛情をたっぷり注いでもらって、本を読んで心を耕し、仲間とともにすくすく成長してください。



《生徒の感想から》

「読書の日」というものがありました。銭天堂の動画を見たり、自分だったらどんなお菓子を作るか考えたりして本を読む時間でした。こんなに長い時間学校で本を読んだことがなかったので、いい機会になったと思います。私は本が好きなのでとても楽しかったです。

(1年生)

「読書の日」という時間がすごく楽しかったです。図書館に初めて行ってみたいとたくさんの本があり、驚きました。さすが盈進。あと、読み聞かせの「どこいったん」が面白かったです。この授業は通常の授業と違って、時間の流れが早く感じました。「読書の日」をぜひ増やしてほしいと思いました。

(1年生)

「読書の日」は2026年度も継続して実施します。
盈進には本が大好きになる仕掛けがいっぱい。素敵な1冊と出会うきっかけを見つけてくれますように。



中島さち子さん来校！

—— 多様ないのち輝く未来へ～テクノロジー×アートで広がる世界～ ——

2025年10月23日におこなわれた第2回ホンモノ講座には、内閣府男女共同参画局推進課の理工チャレンジ企画のご支援を頂いて、中島さち子さんをお招きしました。中島さんと言えば、昨年大盛況の中終幕を迎えた大阪・関西万博シグニチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」のプロデューサーとして大活躍された若きクリエイターとして知られています。今回は、中島さんの著作を用いて読書科のメソッドで事前学習を進めました。



なかしま さちこ氏 プロフィール

(株)steAm 代表取締役、(一社)steAm BAND代表理事、大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー、内閣府STEM Girls Ambassador、東京大学大学院数理科学研究科特任研究員。国際数学オリンピック金メダリスト。音楽家としての活動をおこなう一方で、音楽数学教育やアート&テクノロジーの研究を進める。

当日は、失敗の連続だからこそ面白い数学の魅力、教科を横断した掛け算による創造力で問題解決力を高めるSTEAM教育の実践、万博パビリオンに込めた思いや完成までの道のりなどバラエティに富んだ講話に中学生も高校生も聴き入りました。音楽×テクノロジーのデモンストレーションや、情熱的なピアノ演奏もあり、会場のボルテージは最高潮に。お楽しみの質問コーナー「教えて！さち子先生！」も盛り上がりしました。

また、第2部の座談会は、教育界を目指す生徒や音楽活動に取り組む生徒、ものづくりに関心のある生徒や主体的に社会活動に挑戦している生徒など個々の具体的なトピックに真摯に向き合い深掘りして頂く有意義な時間となりました。「揺らぎのある遊びからひとの創造力が生まれる」——1人ひとりが、自分の軸を大切に好きなことを掘り下げ、「クラゲ」のような柔軟な心でいろんな場で共鳴し合った多様ないのちと何かを生み出していく存在に。「新しい時代の風」を感じる素敵な講演でした。



音楽のデモンストレーション



サインを求めて大行列



作曲家 阿部海太郎さん再来校！

『私』にしか聞こえない音を、『だれか』に伝えるために



2025年11月21日 ホンモノ講座

1冊の本をきっかけとしてさまざまな出会いが生まれる盈進ドリームプロジェクト。2021年11月22日に感動的なホンモノ講座をおこなってくださった作曲家の阿部海太郎さんが2度目に来校されたのは、大人気を博したNHK連続テレビ小説『らんまん』の音楽を担当された2023年でした。そしてさらに2年後の2025年秋は、3度目のご来校です。今年のホンモノ講座は従来とは一味違う取り組みをということで、「作曲」という新しい課題に挑戦することにしました。生徒たちの創造力が爆発したエネルギッシュな講座をレポートします。



©高橋マナミ

あべ うみ た ろ う 阿部 海太郎 氏 プロフィール

1978年生。幼い頃よりピアノ、ヴァイオリン、太鼓などの楽器に親しみ、独学で作曲を行うように。東京藝術大学、同大学院、パリ第八大学第三課程にて音楽学を専攻。クラシック音楽の伝統様式に着目しながら今日的な表現を追求する。コンサートの企画やアルバム制作などすぐれた美的感覚と知性から生まれる音楽表現が多方面で評価され、舞台、テレビ番組、映画等、幅広い分野で作曲活動をおこなう。過去の代表作として蜷川幸雄演出のシェイクスピア作品、長塚圭史演出作品、NHK『日曜美術館』、映画『ペンギン・ハイウェイ』など多数。

今回もオープニングは海太郎さんの素敵なピアノ演奏で始まりました。演奏してくださったのは、盈進ではおなじみ"Moments musicaux - Thème"。海太郎さんの指先から発せられるホンモノのピアノサウンドに会場内の空気が一瞬で変化したのをその場にいる誰もが実感できたことでしょう。講演の前半は海太郎さん自身の音楽との出会いや関わりを語ってくださり、海太郎さんの考える「音楽の力」についても深く考えさせられる豊かな時間でした。





《生徒の感想から》

初めて阿部海太郎さんの演奏を聞いて、鳥肌が立つくらい感動しました。ソロピアノなのに、きれいな音がたくさん重なって、まるでどこかの世界に連れていかれるような感覚でした。海太郎さんの演奏や講演を二・三回受けている先輩たちが正直とても羨ましかったです。今回僕が変わったと思ったのは「音楽」というものの考え方。「音楽は言語を越える」ということ、楽譜を通じてさまざまな国の人と交流できたら…と考えただけで自分の世界が広がってワクワクします。また音楽は障害を持たれている方や、亡くなった方とも繋がれる、そんなパワーを持っていることも教えていただき、納得しました。

(1年生)

後半は海太郎さんが用意してくださった楽譜の一部からどんな音楽が想像できるか、「作曲」のベースとも言える活動をおこないました。自分の言葉で曲のイメージを表現したり、ピアノやリコーダー、ドラムといった音楽で続きを演奏したり、生徒の中には身体的なパフォーマンスで表現してくれる生徒もいて、それぞれの個性が大いに発揮された瞬間でした。「自分で楽譜を書いてみよう」という海太郎さんの呼びかけに、いっせいに楽譜を書いてみようとする生徒たち…才能がきらめいています。



今回は作曲がテーマでした。「私たちは鳴っていない音を頭の中で想像することができる。それが作曲の第一歩」というお話が心に残っています。ワークショップでそれを実感しました。自分が頭の中で描いた音を、曲にする面白さを感じました。私は今、歌とダンスを習っているのですが、自分の感性と発想で人と人が分かり合える世界に温かさを感じました。

(3年生)

盈進音楽部のために吹奏楽ヴァージョンをアレンジしてくださった「夏休み」(映画『ペンギン・ハイウェイ』より)を演奏するのも3度目です。高校2年生たちが中学1年生の時に『ペンギン・ハイウェイ』(森見登美彦 著 角川書店)をリレー読書したことで、この曲の演奏も恒例行事となりました。



郊外の町を舞台に、突然ペンギンの群れが出現する不思議な現象「ペンギン・ハイウェイ」や、森の奥で見つけた謎の球体<海>の調査を通し、小学4年生の男の子が成長していく姿を描いた冒険譚。第31回日本SF大賞受賞作。2012年に出版された同作は、2018年アニメ映画化された。

オープンスクールや受験など、盈進の行事の際には海太郎さんの曲が必ず流れます。盈進に初めて来たときのキラキラした気持ちも思い出します。私たちは文章を書いたり、絵を描いたり、ダンスを踊ったりしますが、そうした表現方法の1つが音楽なのだと思います。音楽は人類にとって最大の発明品の1つかもしれません。最後にみんなで「帰り道」を歌ったとき、その音楽が浮かび上がって見えるような気がしました。

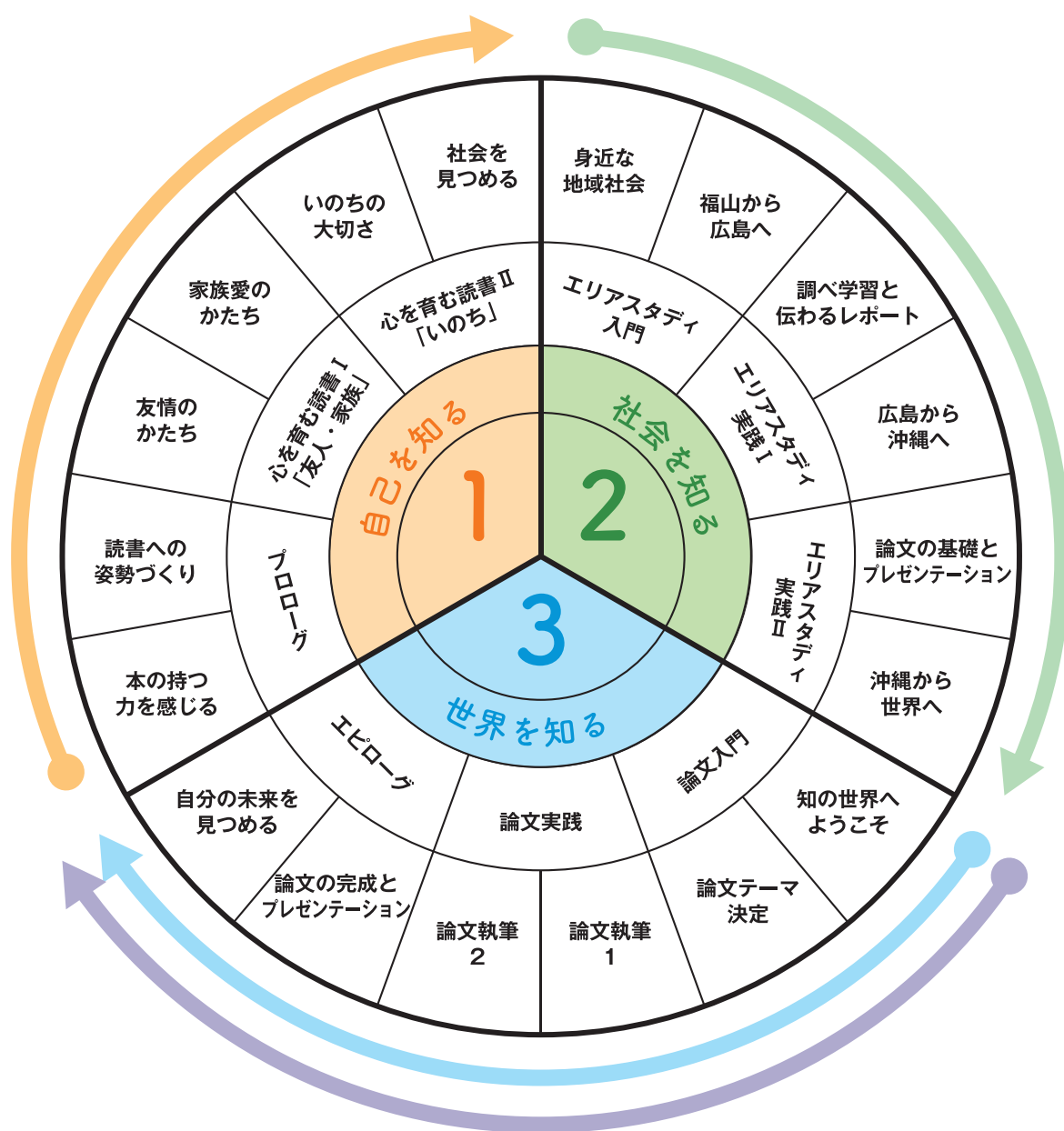
(3年生)

3度目の海太郎ワールド。盈進にはアートの風が流れています。

読書科の学び

～本と出会い、ひとを知る～

読書科の授業には各学年に「学びのテーマ」が設けられています。週1回の授業で選定図書を年間10冊以上、3年間で30冊読むことを目標にしています。3年間の読書活動の中で、前半は仲間と本を読む一体感を味わいつつ、お互いの意見を交流することで、心を豊かに育みます。また後半は、私たちが生きる社会について知り、この世界で今起きていることを見つめ、各自が考える課題を解決します。「読み、書き、伝える」活動の中から自分の生き方を見つめる教科です。



読書科3年間の学びのテーマとカリキュラム

1年生



2年生



2年生では沖縄についての調べ学習をおこなうため、この他にも沖縄に関する本を多数使用します。

3年生



3年生では各自の選んだテーマに基づいて『修了論文』に取り組むため、使用する本も1人ひとり異なります。学校図書館、公共図書館の所蔵する本を自分で見つけることから始めます。



1年生のテーマ 自己を知る personal

1年生のテーマは「自己を知る」。家族や友人とのつながりを通して心の成長を遂げる主人公の姿に、自分自身を重ね合わせて読みます。さまざまな愛情のかたち、友情のかたちに触れ「かけがえのない自分」に出会うとともに、自分を取り囲む人の存在にも気づくようになります。心を育みながら本が大好きになる1年間です。



2年生のテーマ 社会を知る local

2年生は「自己」から「社会」へと視点を移し、読書活動の領域を広げます。私たちの故郷「福山」そして「広島」について知り、「平和」というキーワードを学習旅行で訪れる「沖縄」さらに「世界」に結び付けます。「地域研究」×「平和学習」が生み出すドラマチックな読書活動を展開する学年です。



3年生のテーマ 世界を知る national global

「自己」から「社会」へと視野を広げた2年間の学びを経て、3年生ではもっと広い「知の世界」での学びを体験します。自分の興味・関心のある分野からテーマを設定し、4000字以上の文章をまとめる修了論文は中学校3年間の読書活動の集大成となります。

未来を見つめる15歳へ ～ドリームプロジェクト～

2016年、盈進読書科は「未来を見つめる15歳」の育成を目指して

「ドリームプロジェクト」を立ち上げました。

あれから10年。

1冊の本が、たくさんの感動的な出会いをもたらしてくれました。

わたしたちは、生徒たちの夢の実現を後押しする本の力を信じ、

本を通じた学びの文化を大切にします。



1 世界のTOYOTA
トヨタ自動車の
プリウス開発者
豊島浩二さんが来校！
クルマの未来を
熱く語って頂きました。



2 東京大学教授
玄田有史先生来校！
ホンモノ講座は
ここから始まりました。



4 広島のお好み焼きの
歴史を学び、平和を考えます。
学びのまとめは、現地で実食！

3 『ハブテトルハブテラン』をめぐる旅。
物語の聖地巡礼をしよう！
作者の中島京子先生から
お手紙を頂いて感激！



5 カルビー(株)の
会長兼CEO(当時)の
松本晃さんが来校！
山のような
ポテトチップスを
お土産に。



6 京都大学
霊長類研究所教授(当時)
湯本貴和先生来校！
ヒトとしての力を信じて
生きることの大切さを学びました。



8 外科医 山本健人先生来校！
保健体育科とのコラボレーションで
人体の持つ力を考えました。



7 盈進新校舎図書館
こけら落とし記念。
作家の落合恵子さんによる感動的な講演。
コロナ禍でも「E♡絵本プロジェクト」を実施しました。



百人一首

田中 美羽
福山市立緑丘小出身

努力は結果となる 大切に

中 生 田 甲 定期13期

百人一首が出揃った。開目の笑顔を近づけていた。私は筆記をするのが苦手で、最初は「つづきあやうの白鳥かついでに」たし、と「百人一首」百人一首を完結させた。と、泣きながら、

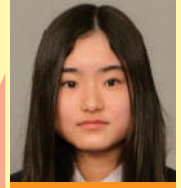
初め「つづき」歌ができてしまひ、かなり苦勞した。しかし、何回も繰り返して練習してつづいた。だんだんと頭の中は静かになっていった。

毎日、1時間くらいしか、白紙の紙で「百人一首」を書きながら読んでいた。この方法でないと自分には無理だ。そして「百人一首」を完結させた。開を二つずつ丁寧に読んで、「あ、これ」と目録の間に書きが浮かんできた。開二つの間の間に「百人一首」の讀もできて、安心した。あった。結果を見ると、文藝性こそなかったが、百人一首は、文藝性もついていた。

一生懸命、百人一首を筆記して良かった。思った。百人一首は、努力は果となる。大切に読んでいくと、思ふ。

(福山)

(2025年12月22日月曜日)



数学への取組

永井 心陽
福山市立久松台小出身

苦手な数学、好きになろう

中学生・森井 一雄
私は、小学校から数学が苦手で、努力をしても、勉強は面白くありませんでした。でも、中学校の先生に話をしたら、数学が好きになる方法がいくつかあるのだと教えてくれました。それ以来、毎日数学の勉強をしています。

まず、基礎知識を固めることが大切です。教科書の例題や練習問題を丁寧に解き、理解することが大切です。分からないところは、先生や友達に質問します。また、授業中に積極的に参加し、先生の話をよく聞きます。そして、毎日の宿題を必ず仕上げます。

次に、応用問題に取り組むことです。応用問題は、基礎知識を応用して解く問題です。最初は難しいかもしれませんが、何度も挑戦すると、少しずつできるようになります。また、応用問題を解くときは、まず条件を読み取り、何を求めたいのかを確認してから解きます。

最後に、定期テスト対策です。定期テスト前は、過去問を解いたり、模擬試験を受けたりして、自分の弱点を知ります。そして、弱点を克服するために、毎日コツコツと勉強します。また、友達と一緒に勉強したり、先生にアドバイスをもらったりもします。

以上が、私が数学が好きになった理由です。数学は、実はとても面白い科目だと思います。ぜひ、皆さんも数学が好きになってください。

(福山)

(2025年2月13日木曜日)



社会の自由研究

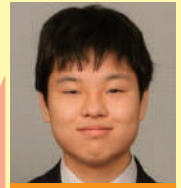
中戸 朝陽
福山市立東小出身

愛地域を調べる駅

中學生 中戸 幹雄
福山市胡町。自宅から近々、祖母の美家があるこの町に昔、「胡町駅」という駅があったことを、自由研究で初めて知りました。今には想像もできませんでしたが、1000年以上前、人々にたいして駅とならうとする図書館で調べ、祖母のひいおやの人にき取り調査をし、単なる交通の拠点にとばかりきた交際の場での、地域の歴史に貢献したことを知りました。駅を中心に商店街を開拓しようとあふれていたのは想像が過ぎると、タムトリップしたような感覚でした。

駅はなくなりましたが、その跡地は今ももの風景の中に残っています。その時を感じさせる建物を見つけたことができた。地域へはいない日常の中に、先代さんたちの思いがけぬ存在として、わが村の誇りと利便と幸せな歴史ともあるのを改めて感じました。胡町の歴史を研究し、僕はこの町への愛がさらに深まりました。身元在町の歴史や文化を大切にしたい。未来に響くように。（福山市）

(2026年1月15日木曜日)



ノートの活用

塚本 智晴
福山市立新涯小出身

やりたいこと書いて読む
 中学生 塚本 智晴 13歳
 僕はやりたいことをノートに書き、毎日夕方に読み返して。
 中学入學後のある日、暮る前に、幾十年以上も前に
 上野原で印刷に残ったアノ文字を思い出した。ま
 た見たくなりまして、次の日もアノ文字を覚えて
 見たのですが、他にもアノ文字がいろいろあるの
 と思い浮かんできまして。
 む、時間には限りがあり、もうひとつアノ文字
 一度はできません。そこで、僕がやりたいこと
 とをアノ文字に書くことにしました。そしてアノ文
 字と比べてはく、思い出したものを覚えて、学校
 で見たアノ文字にしたりして印刷に残ったアノ文
 字、家でノートに書き込んで。
 ある日、担任の先生から、「アノ文字を讀んで
 いてね、そのうちに何か引くかな」と聞きました。
 今まで書いてきたアノ文字は、心でアノ文字を
 かつたものだからどうことを美意識、アノ文字
 の日がアノ文字に書いてきたことを全部読んだ
 はず。
 (第三回)

(2025年4月9日水曜日)

ヤングスポットに挑戦!

13歲

1・2年生は日常生活の出来事やそこで得た学びを文章化し、
中国新聞「ヤングスポット」への投稿に挑戦しています。

14歲



陸上部

山田 幸
福山市立赤坂小出身

中学生 山田 孝 13

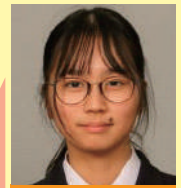
私は中学生になってから陸上競技を始めた。別が速いわけではない。ただ、小学生の頃は「鬼」をしていながら走っていたのは好きだった。3年生の先輩が「走っていい二ッ瀬」をフルアルトで走って、走のうまいのは「二ッ瀬」フルアルトだけ、足踏がうまいのは砂場走と速なうまいと大変な方に進んだ。きつとこの努力を総てとてくれやと、この言葉は心に刺さった。もっと速く走りたいと思っているから、一つ一つを大事に習っていくと思った。

今頃には私の50メートル走のタイムは入学時0.8秒も速くなった。一つは練習だけ、一日も休まず、一つ一つの練習を大事にできたから速くなった。顧問の先生や先輩がアドバイスやサポートしてくれて練習した。結果が付いてくるんだと改めて思った。

そして今、陸上競技がとても楽しい。中学生になって初めて分かった。これも顧問の先生や先輩のおかげだ。

福山大学

(2025年1月28日火曜日)



音楽部

向井 梨紗
福山市立蔵王小出身

部活ノートの言葉 励みに

中学生 中井 梨紗

私は中学校で音楽部に入っています。トランプ、リボン、の練習に励んでいます。

その中で、毎日の振り返りノートというものがあがり、1週間ごとに先生に提出します。

恒例なのは大変ですが、振り返りをすると、それは大層なのでは一生懸命取り組んでいると、提出すると、先輩がコメントを書いてくれるので頑張ることが出来ます。私のことをよく考えておまわってもらえたらうれしいコメントもあり、とても助けています。

学校の行事である感謝祭があり、日々練習に励んでいました。感謝祭の最後には提出したページには本当にうれしい言葉がつけられていました。

私が最初の感謝祭で不足にならないようにと言っていたように、私も準備ができています。

私がいかに音楽が大好きで、私の力になりたいという言葉をいただきました。

高校生の先輩との時間は本当に貴重です。先輩とも一緒に吹けるように部活を頑張りたいです。

(福山市)

(2025年12月8日月曜日)



ヒューマンライツ

宇田 帆花
福山市立水呑小出身

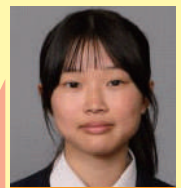
私は今、平和と人権に関する研究と調査をするヒューマン・ライツ・ウォッチで活動している。活動の中で「フットボール活動から学ぶ」というテーマがある。ハンセン病、それはハンセン病や末梢神経などが見られる病気を、進行すると、と、体の一部が変形することもあり、恐れられ、昨夏、瀬戸内市にある国立ハンセン病療養所（通称「長島養生園」）を訪れた。その時、ハンセン病回復者の方々にお話をした。笑顔がすてきで、なだりつづいた。

その方は強制収容された時の話をして下さった。家族から酷い差別を受けていた方から聞くと想像していたよりも何倍も痛ましいことがあった。

私はこの部分に一部までハンセン病や、それに対応した差別と偏見を受けていたことを知らなかった。だからこそ、この過去を一人でも多くの人に知ってもらいたいという思いを、綴りていく。

（福山）

(2026年2月14日土曜日)



応援部

伊藤 姫菜
福山市立大谷台小出身

応援部活 全力で向き合う

中学生 伊藤 穂菜 13歳
私は中学校で応援部という部活動に所属しています。学校の感謝祭で、中絶体育館などでの発表に出ました。そのための練習はきつくて、とても大変でした。

けれど、初めて感謝祭の舞台に立つということができてうれしくてもありました。先輩に励まされて、部活にならなくていい、家でもたくさん練習するようにになりました。

感謝祭は防犯の方たちを、おもなしする会です。本番ではみんなの人たがひびきにうめきました。緊張も不安があったけれど、始めたら何をしたら覚えてないほど楽しかったです。

これからもしっかりと全力で向き合い、たくさんの人たちがいる町では堂々と、一回一回悔いの残らないようにしていきたいです。

そして、どんなときでも諦めずに最後までやりきり、多くの人を応援できるものになりたいです。

(福山市)

(2026年2月15日日曜日)

15歳

修了論文 ～書くことは考えること～

盈進のすべての教員で、執筆をサポートします



読書科の授業では「自己」⇒「社会」⇒「世界」と視野を広げていき、中学修了時には再び「自己」へと回帰するサイクルの読書活動を通じて「未来を見つめる15歳」の育成を目指しています。中学3年生では、興味・関心に基づいたテーマを自ら設定し、4000字以上の本格的な論文に挑戦。専門的な本を読み、自ら調べ、担当の先生の指導を受けながら半年以上かけて論文を書き上げます。主体的な学びを通して思考力を鍛えることで「21世紀型能力」の礎を築くとともに、自分のやりたいこと、なりたい姿を思い描くことができます

2025年度修了論文テーマ例

- 岩絵具と膠 ● 震災と避難所のあり方 ● 高齢者とeスポーツ
- HANIWAの世界 ● 手紙の文化とこれから ● 今を生きる私たちとLGBT
- コンビニの無人化 ● ラジオの未来 ● ヘルプマークの認知度と利用率
- Bリーグの復興と課題 ● 建築と町おこし ● 承認欲求とSNS依存
- 声の仕組みと可能性 ● 未利用魚の活用方法 ● サプリメントと食事の関係
- 医療的ケア児の現状と未来 ● 絶対音感の有無 ● 住まいの照明とその発展
- 社会的視点から考える怪異の変遷 ● 成人食物アレルギーのメカニズム



修了論文は手書きとタブレット入力で
左：盈進オリジナル「修了論文テキスト」

フィールドワーク

この修了論文では、夏休み中に自分で計画したフィールドワークをおこなうことになっています。自らのテーマについてより高度な知識を持つ専門家や文化的・技術的な関連性が見られる企業などを訪問したり、手紙やメール等でやりとりをしたり、指導教員と共に計画した実験を試みたり…と、その手法はさまざまです。もちろん本はそれを読むことで楽しみをもたらしてくれるものですが、本から一步飛び出して、現実社会とのつながりが生まれ、そこに「ひと」との出会いが生まれるとより豊かな喜びを生み出してくれるものです。「読書科」の目指す学びの完成形は、今その価値が注目される「探究」的学びそのものだと言えるでしょう。



プレゼンテーション

また修了論文を書き終えた中学3年生は、3学期に中学2年生に向けて全員でプレゼンテーションをおこないます。これから修了論文に取り掛かる後輩の心に火をつける、伝統の行事です。本校ではICT環境の充実により、ZOOMを用いたインタビューやオンラインプレゼンテーションなど、その内容をさらに発展させながら取り組みを継続しています。



最優秀賞

嶋村 有紗

福山市立川口東小出身

論文タイトル:「地域・子ども会と私たち」

希薄化する地域コミュニティのあり方を身近な「子ども会」という視点から見つめ直した。「なぜ子ども会は減少しているのか。また地域(社会)にどのような影響を与えているのか。」という疑問に対し、「時代の流れによって個人の自由が尊重され、強制的な空気に抵抗を持つ人が増えたからではないか。さらに子どもの塾や習い事、働く母親の増加が子ども会減少の一因ではないか。」という仮説を立てて検証した。

子ども会は、子ども・家庭・学校・地域をつなぎ、地域の活性化や防災・防犯の面でも役に立ち、地域コミュニティを存続するための重要な組織である。既に廃止となった地域もあるが、今後それぞれの地域や事情に合わせた方法で、課題を改善し存続していくべきだ。これからは私自身の成長を支えてもらった地域のあり方を、未来を生きる中高生として考え続けたい。(終章より一部抜粋)

子ども会 地域での重要性

中学生 嶋村 有紗 15歳

中学3年生の時、「地域コミュニティ」をテーマに探究活動をした。町内会や子ども会など、住人同士の関わり合いによって成り立つ組織がある。私自身、小学生の時に加入していた子ども会の視点から、そのあり方を考察した。まず関連本を読み、子ども会の組織数や会員数は、少子化や新型コロナウイルス禍が原因で減少している現状を知った。フィールドワークでは、子ども会役員を経験した方、育成協議会の方、子ども会の研究をしている大学の先生にインタビューをした。

そこで子ども会は防犯・防災の面で役立つ、家庭・学校・地域をつなぐ重要な組織であることを知った。存続させるために中高生にできることとして、自分の住む地域に関する本を読み、理解を深めることが大切と学んだ。

高校生になったこれから探究を続け、地域のあり方を考えていきたい。(福山市)

(中国新聞 2026年4月18日 土曜日)



優秀賞

田口 美空

府中市立国府小出身

論文タイトル:「新聞大国 日本の未来」

「新聞の未来」というテーマで執筆した。「なぜ新聞は必要とされなくなったのか」という疑問に対し「インターネットの急速な普及が関係しているのではないか」という仮説を立てて検証した。新聞は、他のメディアの台頭やコストなどの問題により現代社会におけるその需要はなくなりつつあることが分かったが、私たちの生活にとって情報というものは必要不可欠なものである。将来的に形を変えることになったとしても、新聞やテレビの本質にある「情報を伝える」行為は残していかなければならない。今後は新しいメディアが台頭することで起こる問題、たとえば真偽不明な情報が増えるといった社会問題に直面した際に、メディアリテラシーを持って向き合っていくことが大切である。人類が築いてきた信頼できる古くからのメディアを未来に繋げていくため、メディアを信頼できるものにするために自分には何ができるのか考え続けていきたい。(終章より一部抜粋)

新聞の未来 探究し論文に

中学生 田口 美空 15歳

中学校の3年間、さまざまな探究活動を行った。その集大成として「新聞の未来」について考える「修了論文」を執筆した。

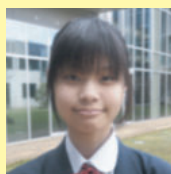
まず、発行部数減少の原因を探るため、本やインターネットで調べた。主な原因として挙げられるのはインターネットの普及だが、他にも読み手の読解力の低下や、新聞が紙であるという理由もあると明らかになった。

そして、関西地方の大学の教授にインタビューをして、ネット普及以外の理由として配達における人手不足や、記事に対する興味が入りそれであることも原因だとおっしゃった。新聞はデジタル化が進んでいる。今後もし近未来で手軽なものに進化していくことが予想される。情報は私たちの生活にとって必要不可欠なものだ。オールドメディアと呼ばれる新聞の信頼度は依然として高いと思う。メディアの本質を未来に残すには何ができるのか考え続けた。(福山市)

(中国新聞 2026年3月28日 土曜日)

2025年度優秀論文

作品の全文は別冊「2025年度 盈進中学校『修了論文』『読書感想文』優秀作品集」をご覧ください。



佳作

古田 紗衣

井原市立荏原小出身

タイトル:「人体におけるかゆみの必要性」

『かゆみ』とは何なのか。なぜ『かゆみ』という感覚が人の体に備わっているのか。という疑問に対して「かゆみはくすぐったさの延長線、皮膚について古い角質や虫刺されなど人体に不要なものを体から取り除くためではないか」という仮説を立てて検証した。かゆみの原因やメカニズムを知る過程で、多くのことが解明されてきたがそれ以上に未知な部分が多い知覚であることがわかった。皮膚科医になるという新たな目標も見つけることができた。

タイトル:「猫の高い所からの着地」

「なぜ猫は高いところから落ちても着地できるのか」という疑問を持った。最初は他の動物よりもバランス能力が高いからだと考えたが、検証を進めると耳の中にある前庭系のバランス能力を使用していたり、落ちる時に物理を使いこなしながら姿勢を整えて着地していたりするとわかった。また「猫の着地は時代が進むにつれて進化してきたのか、それとも、もともとからその能力があるのか」や「猫以外にも高いところから落ちても着地できる動物がいるのか」などたくさんの疑問が生まれさらに猫への関心が深まった。



佳作

井上 結愛

福山市立南小出身



プレゼンテーション最優秀賞

「学歴社会の真相」

藤井 新太

福山市立旭小出身



フィールドワーク賞

「オニバスが絶滅危惧種に指定された要因とは」

嶋浦 万枝

福山市立湯田小出身



フィールドワーク賞

「好まれぬ食の可能性」

橋本 亜蘭

福山市立道上小出身

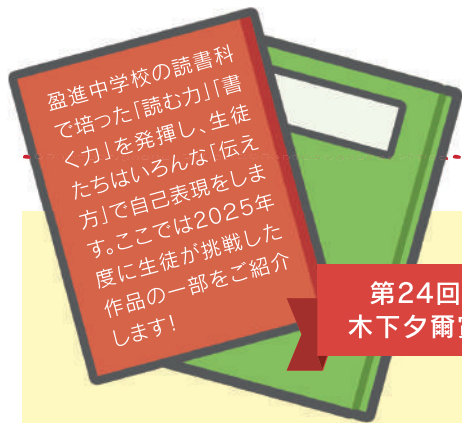


フィールドワーク賞

「バナナの腐敗と熟成のメカニズム」

大下 直輝

福山市立川口小出身



盈進中学校の読書科で培った「読む力」「書く力」を発揮し、生徒たちはいろんな「伝え方」で自己表現をします。ここでは2025年度に生徒が挑戦した作品の一部をご紹介します！

第24回 木下夕爾賞

生徒の活躍

～表現力を磨く～

ふくやま文学館と中国新聞備後本社が主催し、福山市が生んだ詩人「木下夕爾」を顕彰するためにもうけられた木下夕爾賞は、小中学生を対象に詩作を募集し24年目を迎える歴史あるコンテストです。

今年度は3193点の応募があり、中学生の部1204作品の中から中学1年生の藤井心結さん(福山市立泉小学校出身)が特選(第1位)を受賞しました。盈進中学校からは5年連続の特選受賞です。



特選 中学生の部 福山市・盈進中1年 藤井心結

未来へ続く鍵盤

幕のすきまから光が見える。
指先が冷たくて、心臓がうるさい。
名前を呼ばれて歩き出すと、
舞台の上はとてまぶしい。
いすに座って深呼吸をする。
前にあるのは黒と白の鍵盤だけ。
指を置いた瞬間、
自分だけの世界がひろがる。
最初の音は小さく震えていた。
でも次の音はちがう。
少しずつ不安が消えていく。
練習してきた時間を思い出し、
がんばった日々が首に委ねられていく。
間違えそうになっても止まらない。
指先は前へ、前へと進んでいく。
曲が流れるうちに、
胸の中にあったかい光が生まれる。
やがて最後の音が空気に消えた。
ほんの一瞬、静けさがあつて、
大きな拍手が広がった。
その音はとてまやさしかった。
深くおしきをして舞台を降りる。
もう手は震えていない。
音は消えてしまったけど、
あの気持ちは心に残り続ける。
未来へ続く黒と白の鍵盤。

緊張感や達成感が強く心に残ったピアノの発表会を詩にしました。演奏した曲はリフォーム番組で流れる「TAKU-MIN」で、読んだ人に情景が伝わるよう、当時見た光景や気持ちを思い出し、メモに書いてまとめました。発表会ではいつも緊張しますが、積み重ねた練習を思い出します。リクエストされた曲をはつと弾けるようになるのが目標です。

(中国新聞 2025年11月18日火曜日)

優秀 「私のための旋律」

出店樹依 (暁の星小学校出身)

ジジジ…
いつものように
黒くほこりがかぶった袋を開ける
中を開けるとそこには
また小さいこけ茶色の体
まだまだ眠っている
fの文字が刻まれた魂の呼吸口
「今日もよろしくね」
と呼びかけて肩ののせると
まるで温かい手のひらで包み込まれたように温かい
カーテンの隙間から
午後の光がそと差しこむ
部屋の空気さえも
耳を澄ませているようで
糸に指を乗せ「弓を動かす」と
いやなこと
悲しいこと
うれしいこと
全て忘れて 旋律に乗る
音を一つ、静かに重ねていくと
じんわりとあたたかさが胸に広がる
今日は自分のためにひいている



優秀 「人は変わる」

栗木原 絢音
(福山市立道上小学校出身)

自分は本当に変わるのだろうか
白紙にすらりと筆を動かす
何を描いているのだろう
自分でもよく分からないほど
気持ちが落ちつかない
なぜ 思い通りに行かないのだろう
なぜ 自分は上手に描けないのだろう
とてもややもやす
なぜ あの人には出来て自分には出来ないのか
そう思っていた
そんな時 ある誰かが私に話した
頭から心
心から指先
指先から足の先までと
全てに語りかけた
努力をしなさい
あきらめるな
もつと筆を動かみなさい
くじけるな
そういわれても良い絵が描けるのか
そう思ったけどとにかく筆を動かした
なぜだろう
涙が出る
このとき ふと思った
私も良い絵が描けるんだって
泥の底に居たような私が
今や空のてっぺんにいる
こういつことだったんだね
人は変わる
私も変わるって

盈進中学高等学校では毎年冬休みの課題として伊藤園新俳句大賞に挑戦しています。これは応募総数4700万句を超える、日本最大級の俳句コンテスト。第36回は応募総数184万5983句の中から、中学生は5名の生徒が入賞、4名の作品がパッケージ掲載されました。なお今回は団体応募賞も受賞。盈進冬の風物詩です。(学年は応募時)

伊藤園おーいお茶 第36回新俳句大賞



【後援団体賞毎日文化センター選】※パッケージ掲載
ゆで卵のまるさが欲しい十五歳
2年 松井颯佑 (福山市立千田小学校出身)

【佳作特別賞】※パッケージ掲載
丁寧な卵をむいて冬の朝
2年 金政弦希 (福山市立御幸小学校出身)

【佳作特別賞】※パッケージ掲載
白く舞う雪と私はバレリーナ
1年 河上友里愛 (福山市立湯田小学校出身)

【佳作特別賞】※パッケージ掲載
稲光うつすらゆらぐ隠れ蓑
2年 藤本貴憲 (福山市立神辺小学校出身)

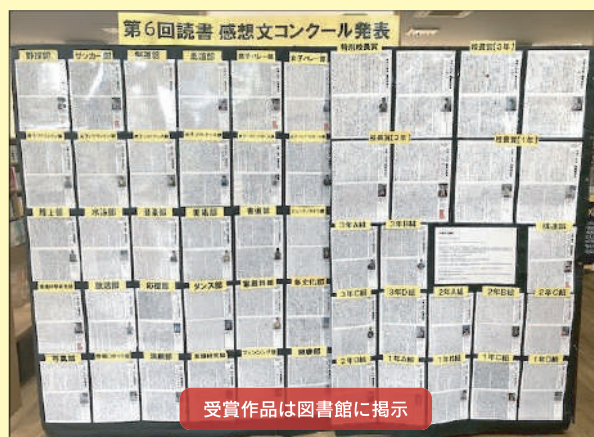
【佳作】
冬の朝カチカチ鳴らすシャープペン
2年 佐藤壮真 (福山市立御野小学校出身)

盈進中学校 第6回校内読書感想文コンクール

盈進中学校では、2020年度より校内読書感想文コンクールを実施しています。これは、朝読書や読書の授業などで読んだ本についての自分の思いや考えを文章化するもので、校長賞をはじめ、各クラス担任賞さらにはクラブ顧問賞まで用意してある盈進のビッグイベントになっています。



3学年(当時)表彰の様子



受賞作品は図書館に掲示

第5回 お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール

公益財団法人博報堂教育財団主催による第5回「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」において、読書推薦作文に中学校1～3年生全員で取り組んだ結果、4年連続の団体賞を頂きました。このコンクールは子どもたちの読書機会の拡大を目的とし、2020年から開催されたもので、第5回となる今大会には554団体の応募があり、うち団体賞は全国で51団体が受賞しています。学校全員で本を読む文化を大切にしている盈進中学校にとって、うれしい入賞のお知らせです。(なお、「入賞団体の声」として本校読書科が取材を受け、「読売中高生新聞」ならびに「朝日中高生新聞」および、コンクールHPに掲載されました。次頁参照)



読売中高生新聞で紹介されました

入賞団体インタビュー

えい しん
盈進中学校

「言葉の力」は、読書を起点に育まれる



(上下)生徒主体でつくる読書文化。読書部の手作りパネルが図書館に彩りを添える。

財団 まさに「読み書き、伝える」という営みを通して、自分の生き方を見つめていく学びですね。上山 はい。その通りだと思います。また本校では、「キャリア読書」にも力を入れています。将来の生き方を

「言葉の力」を育てることが、すべての学びの土台。上山 朋子教諭(以下、上山) 本校は1904年創立で、実社会で活躍できる人づくりを目指しています。平和と環境を大切にしたい学びの中で、軸となっているのが「言葉の力」です。現在は生徒数も増え、467名が学んでいます。学年ごとにテーマを設け、そのテーマに読書活動も連動させています。博報堂教育財団(以下、財団) 読書科という教科を設けていこうという点が印象的ですが、どのような背景があるのでしょうか。上山 1992年に中学校を再開した際、「人づくり」を柱に、読書科、創作科にんげん科の3教科を設けました。創作科は芸術や技術分野、にんげん科は道徳、そして読書科はその土台として「言葉の力」を育てる教科です。34年目になりますが、週1時間、学校として大切に積み重ねてきました。「言葉の力」がなければ、自分の考えを持つことも、人と関わることもできません。読書を通して、その基礎を育てていくことを大切にしています。財団 具体的にはどのような学びを行っているのでしょうか。上山 読書科のテーマは「本と出会い、ひとを知る」です。週1回の授業で年間10冊以上、3年間で30冊以上の読書目標にしています。前半では、仲間と同じ本を読み、意見を交わしながら一体感を育み、他者の感じ方に触れることで自分の内面も深まっています。後半では、故郷である福山や広島を起点に、沖縄などから平和について学び、世界へと視野を広げていきます。地域と世界を結びつけていこうという最終的には自分の興味関心からテーマを設定し、4000字以上の修了論文としてまとめます。入学時から本が好きな生徒ばかりではありませんが、読書科での経験を通じて、そのイメージは大きく変わっていきます。周囲の友人や教員の姿に触れ、「読んでみたい」「話し合いたい」と感じるようになり、文章が認められることで意欲も高まっていきます。一方で、高校進学後は忙しさから読書から離れることもあり、中学校の3年間で「読むことは楽しい」と感じられれば、将来ふたたび本に戻るきっかけになります。そうした土台を育てることが、読書科の役割だと考えています。

財団 具体的にどのような学びを行っているのでしょうか。上山 読書科のテーマは「本と出会い、ひとを知る」です。週1回の授業で年間10冊以上、3年間で30冊以上の読書目標にしています。前半では、仲間と同じ本を読み、意見を交わしながら一体感を育み、他者の感じ方に触れることで自分の内面も深まっています。後半では、故郷である福山や広島を起点に、沖縄などから平和について学び、世界へと視野を広げていきます。地域と世界を結びつけていこうという最終的には自分の興味関心からテーマを設定し、4000字以上の修了論文としてまとめます。入学時から本が好きな生徒ばかりではありませんが、読書科での経験を通じて、そのイメージは大きく変わっていきます。周囲の友人や教員の姿に触れ、「読んでみたい」「話し合いたい」と感じるようになり、文章が認められることで意欲も高まっていきます。一方で、高校進学後は忙しさから読書から離れることもあり、中学校の3年間で「読むことは楽しい」と感じられれば、将来ふたたび本に戻るきっかけになります。そうした土台を育てることが、読書科の役割だと考えています。

財団 読書科という教科を設けていこうという点が印象的ですが、どのような背景があるのでしょうか。上山 1992年に中学校を再開した際、「人づくり」を柱に、読書科、創作科にんげん科の3教科を設けました。創作科は芸術や技術分野、にんげん科は道徳、そして読書科はその土台として「言葉の力」を育てる教科です。34年目になりますが、週1時間、学校として大切に積み重ねてきました。「言葉の力」がなければ、自分の考えを持つことも、人と関わることもできません。読書を通して、その基礎を育てていくことを大切にしています。財団 具体的にはどのような学びを行っているのでしょうか。上山 読書科のテーマは「本と出会い、ひとを知る」です。週1回の授業で年間10冊以上、3年間で30冊以上の読書目標にしています。前半では、仲間と同じ本を読み、意見を交わしながら一体感を育み、他者の感じ方に触れることで自分の内面も深まっています。後半では、故郷である福山や広島を起点に、沖縄などから平和について学び、世界へと視野を広げていきます。地域と世界を結びつけていこうという最終的には自分の興味関心からテーマを設定し、4000字以上の修了論文としてまとめます。入学時から本が好きな生徒ばかりではありませんが、読書科での経験を通じて、そのイメージは大きく変わっていきます。周囲の友人や教員の姿に触れ、「読んでみたい」「話し合いたい」と感じるようになり、文章が認められることで意欲も高まっていきます。一方で、高校進学後は忙しさから読書から離れることもあり、中学校の3年間で「読むことは楽しい」と感じられれば、将来ふたたび本に戻るきっかけになります。そうした土台を育てることが、読書科の役割だと考えています。

「言葉の力」を育てることが、すべての学びの土台。上山 朋子教諭(以下、上山) 本校は1904年創立で、実社会で活躍できる人づくりを目指しています。平和と環境を大切にしたい学びの中で、軸となっているのが「言葉の力」です。現在は生徒数も増え、467名が学んでいます。学年ごとにテーマを設け、そのテーマに読書活動も連動させています。博報堂教育財団(以下、財団) 読書科という教科を設けていこうという点が印象的ですが、どのような背景があるのでしょうか。上山 1992年に中学校を再開した際、「人づくり」を柱に、読書科、創作科にんげん科の3教科を設けました。創作科は芸術や技術分野、にんげん科は道徳、そして読書科はその土台として「言葉の力」を育てる教科です。34年目になりますが、週1時間、学校として大切に積み重ねてきました。「言葉の力」がなければ、自分の考えを持つことも、人と関わることもできません。読書を通して、その基礎を育てていくことを大切にしています。財団 具体的にはどのような学びを行っているのでしょうか。上山 読書科のテーマは「本と出会い、ひとを知る」です。週1回の授業で年間10冊以上、3年間で30冊以上の読書目標にしています。前半では、仲間と同じ本を読み、意見を交わしながら一体感を育み、他者の感じ方に触れることで自分の内面も深まっています。後半では、故郷である福山や広島を起点に、沖縄などから平和について学び、世界へと視野を広げていきます。地域と世界を結びつけていこうという最終的には自分の興味関心からテーマを設定し、4000字以上の修了論文としてまとめます。入学時から本が好きな生徒ばかりではありませんが、読書科での経験を通じて、そのイメージは大きく変わっていきます。周囲の友人や教員の姿に触れ、「読んでみたい」「話し合いたい」と感じるようになり、文章が認められることで意欲も高まっていきます。一方で、高校進学後は忙しさから読書から離れることもあり、中学校の3年間で「読むことは楽しい」と感じられれば、将来ふたたび本に戻るきっかけになります。そうした土台を育てることが、読書科の役割だと考えています。

読書推せん文コンクールを主催する博報堂教育財団が、昨年度の団体賞を受賞した盈進中学校(広島県)を訪問し、読書科主任上山朋子教諭にお話を伺いました。

見据えた視点から、関心のある分野や、将来自分が会いたいような人が書かれた作品に親しむことを意識しています。実際に、本との出会いから進路を見つけていった生徒もいます。中学2年生で、隈研吾さんの本に出会って関心を深め、3年生の修了論文ではその建築をテーマに探究しました。完成した論文を本人に送ったことをきっかけに実際に会える機会をいただき、その経験から建築への思いをさらに強め、現在は大学で建築を学んでいます。このように、読書を起点に興味深まり、人との出会いを経て、自分の進む道へとつながっていく。そうした積み重ねが、生徒の未来を形づくっていくのだと感じています。

財団 「届きたい一冊」が、言葉を育てる。コンクールを知ったとき、どのような点に魅力を感じ、参加につながったのでしょうか。上山 最初に知ったときに、「これはいいと感じました。まず一人にすめられた本」というコンセプトに強く惹かれました。とくに文字数が魅力的でした。本校では「E-NOTE(イーノート)」という取り組みがあり、生徒は毎日200〜400字程度、自分の考えを書いているため、コンクールも自然と取り組めるようになりました。財団 日常的に言葉をつづっているんですね。上山 そうなんです。担任や副担任がコメントを返しながら、生徒は何を感じ、どう考えたのかを言葉にしています。その積み重ねが「言葉の力」を育てています。

財団 「お気に入りの二冊ライブラリー」も活用したいと思っています。上山 子どもたちには「自由に選んでいい」とだけ伝え、あえて細かい型は示していません。型を示すと表現が似てしまうため、生徒自身が必要に応じて開覧する形にしています。過去の生徒の作品も参考として一部見せることはありますが、見せすぎないように配慮し、「自分らしい表現」を大切にしています。一方で、人の文章に触れることは、自分の考えや表現を見つめ直す機会にもなります。他者の視点を通して刺激を受けたり、成長のきっかけにつながったりすることもあり、そうした学びも大切にしています。財団 二冊の本との出会いを、学びや人とのつながりへと広げていくご実践に、読書の持つ力の大きさを改めて感じました。

財団 「届きたい一冊」が、言葉を育てる。コンクールを知ったとき、どのような点に魅力を感じ、参加につながったのでしょうか。上山 最初に知ったときに、「これはいいと感じました。まず一人にすめられた本」というコンセプトに強く惹かれました。とくに文字数が魅力的でした。本校では「E-NOTE(イーノート)」という取り組みがあり、生徒は毎日200〜400字程度、自分の考えを書いているため、コンクールも自然と取り組めるようになりました。財団 日常的に言葉をつづっているんですね。上山 そうなんです。担任や副担任がコメントを返しながら、生徒は何を感じ、どう考えたのかを言葉にしています。その積み重ねが「言葉の力」を育てています。

財団 「届きたい一冊」が、言葉を育てる。コンクールを知ったとき、どのような点に魅力を感じ、参加につながったのでしょうか。上山 最初に知ったときに、「これはいいと感じました。まず一人にすめられた本」というコンセプトに強く惹かれました。とくに文字数が魅力的でした。本校では「E-NOTE(イーノート)」という取り組みがあり、生徒は毎日200〜400字程度、自分の考えを書いているため、コンクールも自然と取り組めるようになりました。財団 日常的に言葉をつづっているんですね。上山 そうなんです。担任や副担任がコメントを返しながら、生徒は何を感じ、どう考えたのかを言葉にしています。その積み重ねが「言葉の力」を育てています。

見据えた視点から、関心のある分野や、将来自分が会いたいような人が書かれた作品に親しむことを意識しています。実際に、本との出会いから進路を見つけていった生徒もいます。中学2年生で、隈研吾さんの本に出会って関心を深め、3年生の修了論文ではその建築をテーマに探究しました。完成した論文を本人に送ったことをきっかけに実際に会える機会をいただき、その経験から建築への思いをさらに強め、現在は大学で建築を学んでいます。このように、読書を起点に興味深まり、人との出会いを経て、自分の進む道へとつながっていく。そうした積み重ねが、生徒の未来を形づくっていくのだと感じています。

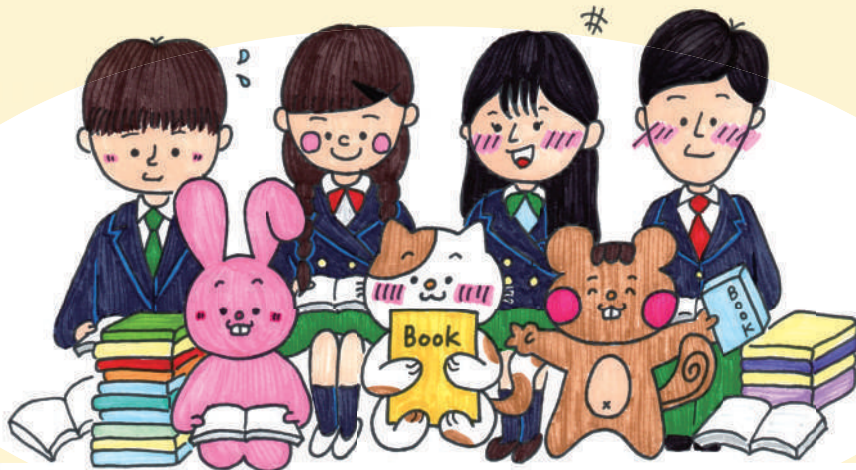


図書室には、読書科の理念が大切に掲げられている。(左から)上山朋子教諭、博報堂教育財団 中岡淳常務理事



日々の思いをつづる「E-NOTE」。毎日の積み重ねが、言葉の力を育てる。生徒と先生の大切なコミュニケーションのひとつ。

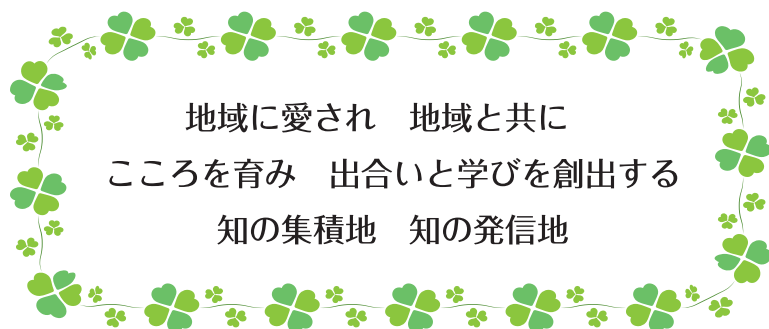
(読売中高生新聞 2026年5月15日)





—— 盈進図書館 —— みどりのECL ～ Eishin Community Library ～

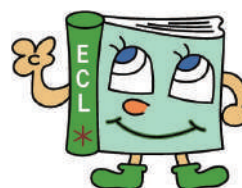
ICT環境の整備、
システムの電子化により
充実した研究活動を
実現!



2019年度、盈進中学高等学校は新校舎での学びをスタートしました。その「顔」とも言えるエントランスには、従来の約3倍の大きさの新図書館が位置づけられています。新しい本も加わり、「知の集積地・発信地」として、さまざまな場面で盈進生の学力のベースを育む読書活動を支えます。また、新図書館の建築には、伝統の「読書科」の学びを生かした工夫が施されています。生徒には1人1台のタブレットICT環境が整い、中学3年生の修了論文など、この新図書館を中心とした探究活動がさらにパワーアップ!



新図書館には盈進に通う生徒・保護者、そして将来的には地域に開けた出会いの場となるように、「みどりのECL」という親しみやすい愛称がつけました。「いーくる」という呼び名は「Eishin Community Library」の略語であり、「盈進に『来る』」という掛詞にもなっています。あわせて図書館オリジナルのマスコットキャラクター「盈図(えいと)くん」も誕生し、図書館で行われるさまざまなイベントに登場します。愛称・キャラクター名・デザインともにすべて校内の生徒による発案です。これは、「みどりのECL」の主役は生徒1人ひとりであり、生徒たちの手によってこの図書館が作られていくことを意味しています。なお2024年度より、「盈進図書館地域開放」を段階的に試行しています。





読書部ニュース!



2025年度の研修は
「文学のまち松山」(愛媛県)



2025感謝祭展示
「Eほん大図鑑2」が800人以上の
来場を頂き大成功!



盈進に新設された「読書部」が本
格的に始動し3年が経過しました!
部員も増員し、自慢の図書館みど
りのECLを拠点にステキな活動を
展開中!ここで紹介します!

「子ども本の森松山」
を訪問



#盈進読書部
インスタ開設!



「谷川俊太郎 絵本★百貨展」に
行ってきました!



読書部の 活動内容



本のあるステキな場所へ行こう



本と関わるステキな人に会おう



本のあるステキな空間を作ろう

TO DO LIST

- 本をめぐる旅
- 読書会をひらく
- イベント企画
- オリジナルグッズ作り
- 本の作者に会いたい
- ブックハントに出かける
- 学校中に本を
- ...まだまだいっぱい!



読書部は夢をカタチにするクリエイ
ティブなクラブです。



WELCOME TO
EISHIN READING CLUB★

READING CLUB NEWS I LOVE READING! WE LOVE READING TOO!

READING CLUB NEWS



JR膳所駅構内にて

読書部は天下を取りにいく

2026年3月30日、晴れ。

読書部はついに念願の場所にたどり着いた。これまで2年間推し活動をしてきた宮島未奈著『成瀬は天下を取りにいく』(新潮社)の舞台、滋賀県大津市膳所の聖地巡礼を果たしたのである。同著は2023年に第1作目を発表されるや否やブームに火がつき、本屋大賞を始めとする数々のアワードを受賞。2作目の『成瀬は信じた道をいく』、3作目の『成瀬は都を駆け抜ける』で惜しまれながら完結し、累計210万部を超す売上を誇る。そう、この旅は、まさに「読書部は天下を取りにいく」ツアーに他ならない。

主人公「成瀬あかり」とは?

閉店を間近に控える西武百貨店に毎日通い、ローカル番組の中継に映り込む中学2年生の成瀬あかり。幼馴染とM-1に挑み、高校の入学式には坊主頭で現れ、目標は200歳まで生きること。京都大学に進学後も、びわ湖大津観光大使として大活躍。読む人皆を魅了してやまない、「かつてなく最高の主人公」、それが成瀬だ。



南禅寺 水路閣



ときめき坂



馬場児童公園



西武百貨店跡地前



ミシガンクルーズ

膳所から京都へ、 読書部は都を駆け抜ける

あちこちに成瀬が出没する膳所観光を終えた一行は、京都へと向かう。琵琶湖疎水として知られる南禅寺の水路閣や、銀閣寺までの哲学の道、成瀬の母校京都大学、そして学問の神様、北野天満宮。これらは全て物語に登場するスポットである。膳所から京都を大満喫だ。

すてきなニュース!

中学生の成瀬あかりが、高校生、そして大学生へと成長していく物語。家族、友情、夢... いろんな切り口で読み深めることのできるこの本が、読書科の集団読書本に決定!



京都大学



北野天満宮

私の盈進読書科

～卒業生の声①～



《2024年度高校3年生/チャレンジャーコース/陸上部キャプテン》

《2024年度高校3年生/チャレンジャーコース/ソフトテニス部キャプテン》

塚本 宗史（福山市立道上小学校出身）

西松 憲吾（福山市立加茂小学校出身）

島根大学 総合理工学部 総合理工学科へ進学

島根大学 材料エネルギー学部 材料エネルギー学科へ進学

「夢は続く、仲間と共に」——中学時代から仲の良い塚本君と西松君の夢にはある共通点があり、中学3年生の修了論文でも共同研究に取り組んだ経験を持ちます。読書科のプログラムの中で確かにしてきた2人の夢。偶然にも同じ大学に進学することになった2人のこれまでとこれからを語ってもらいます。

❖島根大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

塚本：木造建築に興味があります。五感に訴え、ストレス軽減やリラックス増進に効果的な素材に魅力を感じます。将来的には1級建築士を目指しており、古民家などのリノベーションにも挑戦したいです。

西松：僕は機能性やデザイン性に富み、なおかつ環境にも優しい素材の開発に関心があります。新素材の創造や再利用について取り組む研究室で学び、将来は土木の専門技術を街づくりに生かしたいです。

❖2人とも共通点は「建築」ってことだったよね。それはいつから意識し始めたの？

塚本：小学4年生の時から「建築士」が夢でした。中学1年生の時には自分の夢について描く「ドリームキャンバス」も作成しましたし、文章を「中国新聞ヤングスポット」にも載せて頂きました。

西松：中学2年生の読書・探究の授業で、憧れの人に手紙を書く機会があって、スペインのサグラダファミリアの彫刻で知られる外尾悦郎さんに手紙を書きました。返事を頂いたのは感動的でした。

❖夢が重なる2人は、中学3年生の修了論文でも「建築」をテーマにしたんだってね。

塚本：中学2年生で隈研吾さんを知った僕は、隈さんの作る木造建築に憧れました。ちょうどその頃東京オリンピック目前で、彼が手掛けた国立競技場でも話題になっていましたからね。岡山県の蒜山でおこなわれていた「隈研吾展」で隈建築の実物を目にした僕は、修了論文でさらに考察したいと考えました。

西松：僕は木造建築とは対極にあるコンクリート建築の美しさに惹かれ、安藤忠雄さんの建築に興味を持ちました。近年日本各地で子ども向けの図書館建築に力を入れているという彼の生き方にも憧れています。

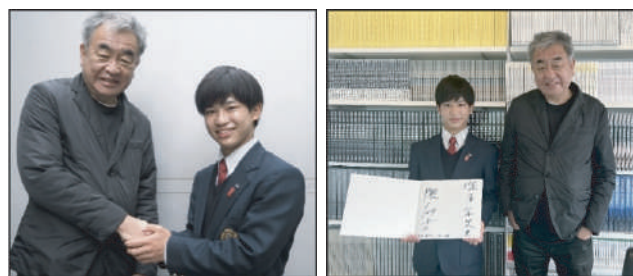


❖ 修了論文の執筆はどうだった？

塚本: 僕たちは修了論文の執筆の一部をグループ研究という形でおこないました。一緒に「尾道市立美術館」にも行きましたし、中学3年生の芸術鑑賞で直島に行き、一緒に「地中美術館」にも行きました。
西松: 仲間がいて心強かったです。僕は原稿用紙27枚、塚本君は32枚の大作を書き上げました。

❖ 塚本君は実際に限研吾さんにお会いしたんだよね。

塚本: 論文を書き上げた記念に隈さんに送ったところ、東京にある隈さんの建築事務所に招待して頂きました。サイン入りの本もプレゼントしてくださったんですよ。宝物です。隈さんは世界的な建築家でありながら中学生の僕の話聞いてくださり、励ましてくださって…最高の中学卒業＆高校入学祝いでした。



2022年3月26日
隈研吾都市建設設計事務にて

隈さんから本のプレゼント

❖ 読書科の取り組みを経て夢に近づいた2人。進進での6年間を振り返ってメッセージを!

西松: 僕は中学生のときに安藤忠雄さんの建築のかっこよさに魅了されて、「コンクリート」という材料に興味を持ちました。セメントの製造過程で二酸化炭素が大量に発生するという課題があることを知った僕は高校生になると、地元の建設会社を訪れ、実際にコンクリートが作られているところやセメントの強度テストをする過程を見て、環境保護の観点で学習を深めました。中学時代に一緒に探究を深めた仲間の存在は大きかったです。自分の力を引き出してくれた仲間感謝しています。

塚本: 僕も高校では、家が建つまでの工程を実際に目で見たいと考え、工務店で見学させて頂きました。またその後、やっぱり木造にこだわりたい僕は宮大工さんを訪問して学びを深化させました。災害にも強い建築の在り方について考えさせられました。今振り返ってみて、中学2年生の時に憧れの隈研吾さんから頂いたお手紙の中で「中学生のうちはいろいろなことに興味を持つといいよ、ガンバッテ!」というアドバイスを頂いたことが僕の原点です。修了論文もまずはなんでもやってみよう!という気持ちで取り組んでほしい。今学んでいることはすべて未来につながるということをぜひ伝えたいです。

私の盈進読書科

～卒業生の声②～



中学校の6年間で出会った1冊の本が、未来を大きく変えるかもしれません。バイオニア1期生として入学した民宅君は、毎日尾道から電車通学し学業と剣道部との両立を果たした生徒です。彼が盈進の図書館で最初に手に取ったのは『風の谷のナウシカ』。この本との出会いが、文学の扉を開く大きなきっかけになったようです。

《2023年度高校3年生／バイオニアコース／剣道部主将》

民宅 航平（尾道市立栗原小学校出身）

北海道大学 文学部へ進学

❖北海道大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

大好きな近現代の文学を研究したいです。北海道大学は最初の1年目は教養科目・基礎科目を幅広く学ぶ「総合教育部」に配属され、学びのシステムが非常にしっかりしています。それから、やっぱり日本屈指の広大な敷地は魅力的ですね。日本全国から集まったいろんな価値観を持った人と出会い、大いに刺激を受けて、自分の視野を広げたいと思っています。

❖文学好き、ということは小学生の頃から本が好きだったの？

まったく。正直言って小学生の頃はほとんど本を読んだことがなかったです。剣道一筋だったので、小学校から帰ると稽古漬けの毎日でした。本よりもプラモデルやレゴブロックの方に興味を示していた子ども時代です。でも、母がいつも本を読んでいて、それをノートに記録しているような人で…母は僕が知っている人の中で、最強の人間だと思っているんですが、家では読んだ本の話をよくしてくれましたね。

❖中学生になって本を読むように？

はい。盈進に進学を決めた理由の1つに「読書」という授業があったのは確かです。朝読だけじゃなく、授業でも本を読むくらいですから、自然と本を手にするようになっていきました。その中でも衝撃を受けた1冊が、『風の谷のナウシカ』。あっ、これです。まさにこの上下巻。もうだいぶボロボロになってますね。まずは本の大きさに驚いて、「こんな大きな本があるんだ～」と思って図書館で借りて、教室で読んでいたんです。そうしたら本当に面白くて。やっぱりナウシカは原作で読むべきです。非日常感というか、もうスケールが違います。核戦争後の世界のメタファーとも読み取れる舞台設定は、資本主義や科学技術への批判と環境問題への警鐘とも捉えることができ…宮崎駿さんすごすぎます。



❖『ナウシカ』を朝読で読みふけっている姿がとても印象的でした。

本が大きすぎて民宅君の姿が見えなくなっちゃってました。

そうですね(笑)。小学生の頃には読んでこなかった本の世界に一瞬で魅了されるほどのこの1冊との出会いは大きかったです。加えて本好きなクラスメイトの存在もあったように思います。ライトノベル好きな仲間がいて、影響されましたね。好きなジャンルの本の情報交換をしたりして…クラスメイトには、自分で文章を書く仲間も出てきたくらいでした。仲間の力は大きいです、やっぱり。



6年間一緒に過ごした仲間

❖でも中学生の生活も部活動があって忙しかったのでは？

はい。でも本を読みたい気持ちがどんどん高まってきて、部活の休憩時間にも汗を滴らせながら本を読んでいたたりするほどでした。そんなある時、読書の授業の中で感想文を書く機会があったてまたま手に取ったのが上橋菜穂子さんの『精霊の守り人』だったんです。これは僕に強烈なインパクトを与えた本でした。ライトノベルも楽しかったんですが、だんだん物足りなくなっていた頃でした。この本には確かな背景知識に基づく文章の強さがあつたんです。圧倒的にこの世界じゃない感が出ていてしかも文章が完璧に美しい。シリーズがたくさんあるんですが、熱中してどんどん読んでいきました。そのあとに出た『獣の奏者』も含めてどれも素晴らしい作品です。尾道までの電車の行き帰りにもずっと読んでいましたね。すごく分厚くて重たいんですが、荷物が増えても読みたい気持ちの方が強かったです。



剣道部の先輩たちに囲まれて

❖高校生になっても、本を読む時間はあったの？

いいえ。大変でした。クラブの休みが月1回くらいで、高校3年生の8月までやっていましたから、勉強する時間の確保の方が先でした。でもそうになると国語の授業で読んだ作品や、入試問題で解いた作品などに面白さを感じる機会が増えてきました。教科書作品では特に森鷗外の『舞姫』が心に残っています。僕は文学作品の「つくり」に興味があって、きれいな文がどうしてきれいなのか、「読め」ば「読む」ほどそれを「書く」という所為にも関心が湧きました。伏線などの技法についても奥深さを感じてしまいます。



5年生 猛勉強中!

❖民宅君にとって本とは？

本はまず、知らないことを教えてくれます。自分と違う価値観にも出会える。それから僕は本の世界には限界がないと思っています。だって今住んでいる世界とは全く違う世界にだって行けるんですよ。いろんな人の話を聞いてみたいけれど、僕たちはそれが叶わないことも多い。そんなとき、本ならいろんな人との出会いが期待できるんです。そんな風に考えると、「図書館」っていうのは本当に素晴らしい制度だと思います。自分だけでは手に入れることができない本がどこの町にだってある。「図書館」も無限の空間です。もっと活用されるべきですよ。僕は本に関わる仕事、たとえば編集者になりたいと考えていた時期もありますが、人と本とをつなぐそんな仕事もいいかもしれないと今は考えたりもしています。

❖では中高6年間で振り返って、中学生のみんなにメッセージを。

僕は小学生まで漫画以外の本をほとんど読んだことがありませんでしたが、中学生の時に読んだ本がきっかけで本の虜になりました。ボリュームのある入試問題への対応力も身につきますし、そもそもことばを身につけることには他者とコミュニケーションを円滑にできるという本質的な意義もあります。本を好きになるきっかけは何でもいいと思います。とにかく楽しそうな本を手にとってみるのが第一歩です。1冊の本が自分の未来を切り拓くかもしれません。6年間の進進生活の中で、そんな1冊に出会えるといいですね。



北大受験当日の朝

私の盈進読書科

～卒業生の声③～



盈進読書科は2007年から中学3年次の修了論文をスタートさせ、探究学習の先駆けとなる取り組みをおこなっています。こうした探究活動の中で2019年度修了論文において優秀賞を受賞した武田柊哉君は、高校生になってもその取り組みを継続し、自らの学びの道を切り拓いた生徒です。高校卒業時のインタビューをここで紹介します。

《2022年度高校3年生／音楽部》

武田 柊哉（福山市立御野小学校出身）

岡山大学 理学部 生物学科へ進学

❖岡山大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

僕は中学3年生で出合った「コケ」の世界に魅了され、大学で本格的に研究を進めたいと考えています。現時点では「進化生態学」という分野に1番興味があるのですが、入学後はまずしっかりと生物学の基礎知識を学び、研究技法や論文を書くための英語力を身に付けたいと思います。



中学1年生入学式

❖そもそも中学3年生でどうして「コケ」の世界に出合ったの？

当時の担任の先生が「コケ」好きな理科の先生だったんです。中学2年まで環境科学研究部に所属していた僕は、もちろん生き物には興味があった方だと思いますが、正直コケには全く興味がありませんでした。でも先生に誘われてコケ探しのために学校周辺を歩いたとき、そこで初めて地面に生えているコケをルーペで見たんです。コケの種類の多さやその美しさに衝撃を受け、そこから一気にハマりました。



仲間と一緒にコケを観察

❖修了論文も「コケ」がテーマだったよね。

はい。僕がコケについて興味を持った時期がちょうど修了論文に取り組む時期と重なっていて。そこから生態や文化的な面を調べれば調べるほど新しいことを知ることができてどんどんのめり込んでいく自分がいました。自分にとって初めて熱中できるものが見つかったと思えました。

❖武田君が中学3年生だった2019年度からフィールドワークの実施が加わったよね？

世界で唯一コケを専門に研究している服部植物研究所(宮崎県)の片桐所長とメールのやりとりをさせていただきました。また、秋には「キャリア教育in京都」という中3の学年行事があったので、そこで京都大学の杉山教授のお話を聞かせて頂き、個人的に連絡を取ることもできました。それから、倉敷で古書店「蟲文庫」を営んでおられる田中美穂さんという方との出会いも大きかったです。田中さんは、コケやカメヤ星座について探究され、書籍も出版されている方です。田中さんの書かれた『苔とあるく』(WAVE出版)と『ときめくコケ図鑑』(山と溪谷社)の2冊は、僕をコケの世界に導いてくれた大切な本でもあります。

❖修了論文の最後が「研究者でなくてもちょっと研究してみたいという気持ちに繋がった」という結びだけれど、本当に研究者を目指すことになるとはね！

実は6年生の最初までずっと「薬学部」志望にしていたんです。薬剤師になりたいとか、薬学を学びたいとかという気持ちよりも、とりあえず高い目標を持つために掲げていました。でも、いざ本格的に志望校を絞っていく段階になって、「本当に自分がやりたいと思っていることって何だろう」と思い至りました。好きなものを選ぶ僕を家族も応援してくれました。



修了論文プレゼン大会にて

❖武田君をそこまで魅了するコケってどんな生き物なんだろう。

コケは陸上に最初に上がったとされている生物なんです。それこそ4億年も5億年も前です。体のつくりは至ってシンプルで原始的。普通の生物だったら未発達の体ではどんどん他の生物に侵食されて負けてしまうだろうけれど、コケは違います。自分たちの生きる場所を確保してきた逞しさを持っている。たとえば、普通の生物って人間もそうですけど「保水」が大事ですよね。でもコケはたとえ水がない環境でもそれに適応して生きていくんです。

❖コケを研究することで、どんな未来が思い描けるの？

コケってまだまだ分かっていないことの多い生物なんです。でも最近の研究で二酸化炭素を多く吸収することができるということが分かってきています。これは高校生になって授業で取り組んだ「探究」の活動の中で知りました。僕の修了論文には続きがあったんです。「蟲文庫」の田中さんの所にも通い、たくさんのヒントを頂きましたし、京大フィールド研の伊勢准教授とも連絡をとって学ばせて頂きました。僕はコケの生態を環境問題からアプローチする手法で調べたんです。土がなくても生きることのできるコケを壁や屋根に植えれば冷暖房削減にもつながるかもしれないということも分かっています。今後研究が進めば人類を苦しめる病気にだって対応できるかもしれない…コケの持つ力は未知数ですし、だからこそ研究の価値が期待されています。

❖コケが未来を変えるかもしれないね。

では中高6年間を振り返って、中学生のみんなにメッセージを。

1つ言えることは、どこに自分の未来を変える「きっかけ」があるか分からないということです。僕自身が「コケ」というテーマに出合ったのもそうです。色んなことに興味を持って、まずは自分の足でそこに行ってみて、実際に触れてみる。ちょうど僕が中学3年生だった年からコロナ禍が始まり、学校生活もクラブ活動も学校の行事も全てに制限がかかっていったんですが、それももうすぐ落ち着くのではないかとされています。だから皆さんもじっとしていないで、自分の足で自由に動いてみてください。その中でピンときたものを調べ、深めていく。それから、僕は人との出会いにも恵まれていたと思います。修了論文の取り組みもそうですし、自分の進路を切り拓くという時にも、これから社会で生きていく時にも、誰と出会うか、その人とどう関わるかは本当に大事なことだと思っています。

これから僕は世界中にある色んなコケを自分の目で見てみたいと思います。本でしか見たことのなかった世界です。本と出会い、人と出会う修了論文は皆さんにとっても大きなチャンスになるはずです。



「あなたが あなたで あること」

The important thing about you is that you are you.

It is true that you were a baby, and you grew and now you are a child,

And you will grow, into a man, or into a woman.

But the important thing about you is that you are you.

(Margaret Wise Brown "The Important Book")



表紙絵：2024年度高校3年生 三好音奈

裏表紙：盈進中学校読書科／はじまりの1冊

マーガレット・W・ブラウン『たいせつなこと』